

円筒埴輪（鱗付型）



①概要

古墳に最も多く置かれた埴輪が円筒埴輪（えんとうはにわ）です。元々は壺などの器を載せるための台（器台（きだい））を模したのですが、やがて古墳の縁を取り囲むように大量に並べられるようになり、柵のような役割を果たすようになりました。

今回公開している円筒埴輪は行者塚古墳（ぎょうじゃづかこふん）から出土したもので、オーソドックスな円筒埴輪の両サイドに鱗（ひれ）と呼ばれる長方形の粘土板が貼り付けられています。出土した場所は古墳の中心人物が眠る後円部頂からで、2,000本以上の円筒埴輪が置かれていたと考えられる行者塚古墳の中で、最も重要な場所に置かれていた円筒埴輪といえます。本来は埋葬施設を取り囲むようにたくさん並べられていたはずですが、発掘調査で出土したもののうち全体の形がわかるまで復元できたものは画像にあるものを含めた2個体のみです。復元後の大きさは、高さ56.1cm、口縁部の直径35.0cmです。

②ココに注目！！



円筒埴輪には「突帯（とったい）」という粘土紐を輪っか状に貼り付けたものや、器台の名残である「透し孔（すかしあな）」という孔があげられています。

行者塚古墳の円筒埴輪には、大中小の3つの規格があり、場所によって配置する埴輪を変えていたようです。大きさだけでなく、突帯の段数や透し孔の配置、鱗の有無によって8種類に細分できます。後円部頂から出土した鱗付円筒埴輪は、小サイズの円筒埴輪に鱗を付けたものです。



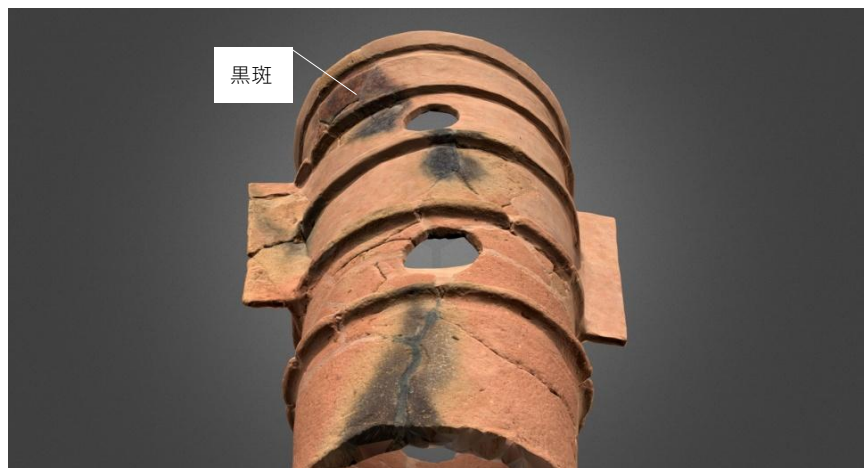
4本の突帯は約11cm間隔で均等に配置されています。さらに一番上の突帯から口縁部までの高さも10cm強とほぼ均等で、古墳に並べたときに統一感が出るように各部のつくりは細かく決まっていたようです。

円筒埴輪は各古墳からたくさん出土するため、それらを比較することで技術の系譜や時期の推定など様々なことが分かります。珍しい遺物も大切ですが、たくさん出土するからこそ見えてくる重要な情報があることを円筒埴輪は教えてくれます。



埴輪の表面をよく見ると、ハケメと呼ばれる細かい線がたくさん見られます。これは粘土を焼く前に表面の凹凸を整えた際についたもので、薄い木の板で表面をなでつけたために木目の痕跡が残ったものです。

行者塚古墳の円筒埴輪の多くは、1回目に下から上になでつけるタテハケをし、2回目に左右になでつけるヨコハケをしています。ただし、完成した後、古墳に固定するために地面に埋めてしまう1番下の段は2回目のヨコハケをしていません。



表面には素焼き（すやき）で焼き上げたときに付く黒斑（こくはん）と呼ばれる黒いシミが見られます。行者塚古墳出土の円筒埴輪には下から上まで帯状に黒斑が見られるものが多く、意図的につけている可能性があります。

焼く時に十分な酸素がいきわたらなかった部分に黒斑がつきやすくなるため、この埴輪は鱗が水平になるように横倒しにして焼かれたと考えられます。